

令和5年度 徳島県立農林水産総合技術支援センター 農業大学校学校評価 総括表その1

「評価」及び「総合評価」の評定基準

A：十分達成できた B：概ね達成できた C：達成できなかった

<p>本年度の重点目標① 多様な進路に応じた人材育成</p> <p>一人ひとりの社会的・職業的自立に向け、学生個々の進路やニーズに対応した教育を行い、生涯にわたる社会人・職業人としてのキャリア形成を支援する。</p>	<p>総合評価</p> <p>A (B) C</p>	<p>(所見)</p> <p>希望進路の実現に向け、「農大進路指導計画」に基づき、進路希望調査、資格取得希望調査及び三者面談を実施し、進路希望を把握するとともに、県の農業法人協会と連携した就農相談会や進路研修「ようこそ先輩！」等を実施し、進路意識の向上を図った。また、進路未決定の学生に対しては個別面談を実施したり、徳島公共職業安定所(駅のハローワーク)等と連携し就職相談を実施したりした。卒業時点での進路決定率は86.2%(3/5現在)であった。卒業生29名の進路先については、自営就農・就職就農16名、農業団体・農業関連企業への就職5名、海外研修1名、公務員1名、進学(4年制大学編入)1名、その他5名となった。</p> <p>4年制大学への編入については、2年次生3名が受験し、1名が合格した。また、1年次生には希望者が2名いるため、引き続き複数の教員で役割分担を行い、希望大学の学力試験、論文、面接等の個別対策を行う必要がある。</p> <p>授業に関しては、ICTを活用したわかりやすい授業の実践に努めている。学生1人1台のiPadを導入し、オンライン学習プラットフォーム「gacco ASP」の視聴授業や授業支援アプリ「MetaMojji Classroom」を活用した授業実践に取り組んでいる。</p> <p>行事等の集団活動に関しては、伝統行事である農大祭、四国農学連スポーツ大会等を実施することができた。特に今年度は、本校学生自治会が四国農学連事務局を担当し、スポーツ大会をはじめとする各行事を企画し、運営に務めた。また、模擬会社「そらそうじゃ」の校外での販売活動については、県内では「SunSunマーケット」、「SunSunナイトマーケット」、「百姓一でのアイス販売」、「ヴォルティス学園祭」、県外では神戸市にて「阪急オアシス店舗前販売」に参加し、体験機会を確保することができた。集団活動や校外体験活動は学生の実践的コミュニケーション力を育むとともに、主体的に課題を発見し改善していく問題解決能力の育成に貢献するものであるため、次年度も学生が成長を実感できるような取り組みにしていく必要がある。</p> <p>以上の観点から、「多様な進路に応じた人材育成」に係る総合評価をB(概ね達成できた)とした。</p>
--	----------------------------	--

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
① キャリアプランニングの育成(将来設計)能力	<p>1 進路希望調査、面談および進路相談会等のキャリア教育を通じて1年次の早期に、働くことの意義や職業観を身に付け、進路について主体的に考え、明確な目標を持てるように支援する。</p> <p>2 徳島県農業法人協会、公共職業安定所等と連携したキャリア教育を推進する。</p>	<p>個人面談または家族等を交えた三者面談を年間に3回以上実施し、1年次生の進路希望状況を的確に把握する。各種キャリア教育をとおり、1年次中に進路目標決定者を90%以上にする。</p> <p>就農に向けた農業法人と連携した就農相談会等の交流学習(各学年1回以上)や、公共職業安定所等と連携した就職ガイダンス(各学年1回)を実施するとともに、2年生前期に実践的なキャリアプランニング教科を充実し、進路実現に取り組む。</p>	<p>進路指導を踏まえた面談を年間3回(5月・6月・1月)実施した。学校評価アンケート「三者面談や個別面談が、コース選択や進路決定に役だった。」の質問に対し1年次生の肯定的評価が72.7%であった。</p> <p>キャリアプランニングに向けて、就職候補先である農業法人等との交流(農業法人説明会、農業法人バスツアー、進路研修「ようこそ先輩！」)及びハローワーク研修を実施した。</p> <p>1年次生の進路目標決定率(12月20日時点)は、96%であった。具体的な就職希望先または進学希望先の決定率は61%であった。</p> <p>農業法人協会との連携により、1年次後期及び2年次前期に農業生産法人との交流会を開催した。2年次生対象の交流会参加16法人のうち7法人10名の就職が内定した。</p> <p>1年次後期と2年次前期に公共職業安定所と連携した就職ガイダンスを実施した。また2年次生前期にはキャリア教育として「キャリア形成(8H)」「社会と倫理(再開、12H)」「キャリアデザイン(新設、14H)」の授業を集中させ、就職に向けての実践力を培った。</p> <p>キャリア形成に関する学生アンケートでは、「進路選択、進路実現のために役立った」の項目で、肯定的評価が88.5%、2年次生卒業時点での進路決定率が86.8%(2/13現在)と、やや低迷した。</p>	B	B	<p>進路指導担当者と連携し、個人面談や農業法人との交流・研修会等を充実させ、2年次当初から就職活動に取り組めるように、進路指導に努める。</p> <p>農業生産法人との交流会等のキャリア教育が進路選択や進路実現にとって有意義であることを事前に十分指導する。</p> <p>また、事後指導として個別面談を実施するなどしてキャリア教育が進路選択や進路実現に直結するよう支援する。</p>
学校関係者委員の意見		・就職支援、キャリア教育を積極的にされているのは高く評価できる。				

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
② 個々のニーズに基づいたマンツーマン指導の充実	1 学生に基礎的・基本的知識を確実に習得させ、学力向上を図る。	職員の授業改善に係る肯定的評価を90%以上にする。 講義で行われる教養科目・専門科目、それぞれの不認定者数を10%未満にする。	職員の授業改善に対する学生の肯定的評価の10項目平均値は96.7%であった。 1・2年次生とも不認定者が10%を超えたのは3科目。	A	B	学生の学習に対する興味喚起及び学習意欲の向上。
	2 進学希望者には、「進学対応カリキュラム」により、学力向上を支援する。特に編入学試験等で必要となる英語・化学・生物・小論文・口頭試問においては、補習や個別指導を行う。	進学を希望する学生の合格決定率60%以上を目指す。	進学希望の学生には、個別に専門科目の補習や論文作成、口頭試問対策、面接指導を行った。 4年制大学編入学試験受験者は3名おり、うち1名が愛媛大学への編入学試験に合格した。	B		個別指導開始時期を早めるとともに、自主的に学習を行う意欲を向上させる。
	3 農業法人との交流会、履歴書作成指導等の実施により、1年次の早期から就職活動に向けた意欲の醸成を図る。	農業法人との交流会に参加した1年次生の概ね2割以上が次のステップであるインターンシップに参加するよう指導する。 1年次の1月には履歴書作成に関する指導を開始し、必要に応じて個別指導を行う。	農業法人との交流会「農業法人説明会」を10月に開催した。次のステップであるインターンシップには6名の学生が参加した。インターンシップ参加率は26%であった。 1年次の2月に「ハローワーク研修」を実施し、就職活動の始め方やその留意点(求人票の見方、履歴書の書き方等)について指導を行った。	A		仕事への適性を把握するためにインターンシップは有効であるため、より多くの学生が参加するよう指導を行う。 履歴書作成については、特に重要な志望理由や自己PRについて作成指導をするとともに、企業研究を十分行うよう指導する。
	4 学生のニーズに対応した資格取得講座を開催し、資格取得を支援する。	造園技能検定、危険物取扱者試験、毒物劇物取扱者試験、大型特殊免許、大型特殊けん引免許、農業技術検定、フォークリフト、わな猟免許、土壤医検定、家畜人工授精師、家畜商、英語試験、パソコン検定に係る講座を開催する。学生の80%以上が講座を受講する。	造園技能検定、英語試験対策講座、危険物取扱者試験、毒物劇物取扱者試験、大型特殊免許、大型特殊けん引免許、農業技術検定、フォークリフト、狩猟免許、土壤医検定に係る特別講義を開催した。 学生の65.4%※が講座を受講した。 ※受講したと認定された者の数。 1年次生の講座受講率は、82.6%。 2年次生の講座受講率は、51.7%。	B		意欲の醸成や運営手法等を検討する必要がある。 学生の資格取得希望を調査し資格取得講座の設定に活かす。
	5 前年度までの受験報告をもとに作成した「就職・大学編入学試験受験報告書」や、「就職試験でよく聞かれる質問集」、「就職試験面接指導マニュアル」を活用し、各々の進路に合わせて個別の面接指導を行う。後期においては進路未決定者に対して進路面談を実施する。	進路指導に対する学生の肯定的評価を80%以上にする。 年度末の進路決定率を90%以上にする。 2年次生の進路未決定者に対し個別進路面談を進路が決定するまで必要に応じて実施する。	就職試験受験報告書などを活用し、各学生の就職試験前には可能な限り全員に個別指導を行った。 2年次の進路指導に対する肯定的評価が88.5%、三者面談や個別指導についての肯定的評価が85.2%であった。 卒業時点での進路決定率は、86.8%(2/13現在)であった。 進路指導については、数値目標を達成しているが、進路決定率については、数値目標を達成しなかった。	B		個別面談の機会を充実させ、進路実現の重要性や働くことの意義等について1年次から意識付けする必要がある。
学校関係者委員の意見	<ul style="list-style-type: none"> <li>進路指導はクラス担任の存在が大きいので、個別面談を充実させてほしい。</li> <li>資格試験対策講座に「簿記」を加えてはどうか。数字が分かる経営者育成のためにいいのではないか。</li> </ul>					

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
③ 高度情報化への対応とコミュニケーション能力並びに問題解決能力の育成	1 現在のパソコンにおいて事実上の「標準」となっている「Microsoft Office」の各ソフトウェアを活用できる能力を育成する。 授業内容及び機械作業等の動画教材を作成し、インターネット環境等を用いて、予習、復習が行える学習環境を整備する。	学生アンケートで情報活用能力に関する自己評価を実施し、ワード、エクセル、パワーポイントを活用できる学生を80%以上にする。 動画教材を3個以上作成し、既存の動画とともにインターネット環境でいつでも閲覧できるようにする。	「ワード、エクセル、パワーポイントなどの基本的な使い方を習得できた。」という項目に肯定的な回答をした学生が、1年次生では86.4%、2生では92.6%であった。また、「学習や体験したことを分かりやすくまとめ、パワーポイントなどを用いて説明することができた。」という項目に肯定的な回答をした学生が、1年次生では86.4%、2年次生では92.6%であった。 動画教材は6個作成し、インターネット環境で閲覧可能となっている。	A	A	引き続き「ワード、エクセル、パワーポイント」を習得・活用できるよう指導に努める。 授業内容及び機械作業等の動画教材を作成し、タブレット等を用いて、いつでも、予習、復習が行える学習環境を整備するとともに閲覧環境を整備する。
	2 プロジェクト学習における計画段階から調査・研究に至る一連の取組や、それらの成果や課題をまとめ、発表する機会を設定することにより、正確かつ確かな情報伝達能力、並びにプレゼンテーション能力を育成する。	コース内で、プロジェクト学習の進捗状況を発表する機会を、年間3回以上設定する。	プロジェクトの計画発表、中間発表、成果発表の練習も兼ねて、コース内で進捗状況を発表する機会を3回以上設け、プレゼンテーション能力の向上に努めた。 成果発表会における職員による評価が10点満点中7点以上の学生は29人中26人で、89.79%であった。また農業生産技術コースは83.3%。6次産業ビジネスコースの学生は100%であった。	A		プロジェクト学習の計画段階からの指導・助言を充実させる。
	3 ワークショップやグループ活動等、知識を相互作用的に活用する機会を授業や実習に取り入れ、言語活動を活性化させることにより、思考力・判断力・表現力等を育成する。	コース実習の時間のうち、年間20時間以上を、話し合い・討論・発表などの言語活動の時間にあてる。	特に各種発表会の準備の際に発表の仕方や資料の提示方法などの検討を行い、言語活動の充実を図った。また、実習前の予習や復習の充実を図った。実習前の座学や情報収集活動などを農業生産技術コースでは20時間程度、6次産業ビジネスコースでは30時間程度確保した。	A		引き続き授業や実習において言語活動を適宜活用し、思考力や判断力の育成に努める。
学校関係者委員の意見		・動画教材を作っているのは学生にも農家にも有意義であると思うので、ホームページへのアップも考えてほしい。				

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
④ 体験的な学習活動による実践力の育成と社会性の醸成	1 模擬会社「徳島農大そらそうじゃ」の活動は実習やプロジェクト学習と一体とみなしている。そらそうじゃの業務部ごとに、学生主体の運営を支援する。	定例会(業務担当者会)を定期的開催し、そらそうじゃでの活動に対する学生の肯定的評価を80%以上とする。	1・2年生合同の定例会(業務担当者会)を年7回開催した。そらそうじゃを通じた商品開発や販売技術向上について、肯定的評価をした学生は83.7%であった。	A	B	定例会(業務担当社会)を充実させるため、そらそうじゃの学生取締役で組織する役員会を事前に開催し、打ち合わせる。農業法人との交流会等においてそらそうじゃの活動について意見交換をする。
	2 模擬会社「徳島農大そらそうじゃ」での活動を通して、責任感や協力を重んじる姿勢を、農業大学の文化として定着させる。	学生アンケートを実施し、そらそうじゃでの活動における「責任感」や「協力」等に関する肯定的評価を90%以上にする。	生産、出荷調整、商品陳列、売り場レイアウト等、グループを組んで実習し、「責任感」や「協力」等の大切さを養ってきたが、これらに関する学生の肯定的評価は87.8%であった。	B		生産～販売に至る一連の流れを、グループワークとして繰り返し学習するとともに、ヴォルティス学園祭やとくしまマルシェ等の各種イベントに参加し、仲間とともに活動する機会を増やす。
	3 ロビー市を充実させるため、販売品目、目玉商品などを店頭掲示やSNSにより情報発信する。	SNSのロビー市情報を、7月から毎月1回以上更新する。 開市日程、販売予定品目などについて、農大ホームページ、SNSを活用して情報発信する。	インスタグラムに、SUNSUNマーケット、ヴォルティス学園祭等のイベント販売やロビー大売り出しの案内ほか、ロビー市の出荷状況等14回投稿した。	B		ホームページやSNSをさらに活用して、そらそうじゃの活動状況や販売情報を積極的に発信する。
	4 「農業・6次産業体験学習」の実施に際し、事前に学習のねらいや受講の心構え等の指導助言を徹底し、農業会議とも連携しながら研修先の支援のもと、職業体験を通じて実践力と社会性を育成する。	体験学習によって実践力や社会性が向上したと実感する学生を90%以上にする。 また、受け入れ先からも意見を聴取し、80%以上の研修先から肯定的評価を得る。	農業、食品関係の法人、農業士各位の御協力により体験学習が実施できた。実践力や社会性の向上について、学生全員(100%)が「大変そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答した。 研修先からの評価では、アンケート回答者21名中、15名(71.4%)から肯定的評価を得られた。否定的な評価を受けた学生は「積極性や意欲に欠ける」ことが要因であった。	B		学生の自己評価は高かったが、研修先の評価との間に若干の乖離が見られた。 学生個々の取組意欲によるところが大きく、事前の説明会等での目標明確化や意識の醸成などをより強化する必要がある。 また、研修先からの回答率が67.7%にとどまり、評価手法を再検討する必要がある。
	5 「農業・6次産業体験学習発表会」を開催し、学生が感じた成果と課題を整理して発表することで、学習内容の強化と定着を図る。	発表会に向けた事前準備の段階の個別指導を充実させ、全員が合格基準を満たす発表ができるようにする。	体験学習の目的、学習内容等について、分かりやすい資料づくり、スライド作成を指導し、9月の発表会では、整理されたものを視覚的に伝えることができていた。職員からの評価では、86%の学生が、合格基準を満たした。	B		発表内容の取りまとめについて個別に指導助言を行い、発表力(プレゼン力)を育成する。
	6 校外研修等を通じて、先進的な取り組みを調査研究することにより、幅広い視野と地域振興につなげる実践力を養成する。	12時間(6時限)以上の研修時間を設ける。	農業生産技術コースは、種苗会社を視察すると共に、量販店での販売状況等を調査研究し、16時間の研修時間となった。6次産業ビジネスコースは、中山間地域での加工品開発等の取り組みについて視察し、12時間の研修時間となった。	A		学生の意向を勘案し、継続実施に努める。
学校関係者委員の意見	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「そらそうじゃ」について、農業法人の社長から意見やアドバイスをもらうことを考えてもいいのではないか。また、生産者と連携してはどうか。</li> <li>・「そらそうじゃ」について、消費者ニーズが聞けるのはいいと思う。生協も組合員対象にアンケート調査が可能なので連携できる。</li> </ul>					

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題	
⑤	特別自主活動・自・律性外の活動の醸成と活性化づくりによ	1 学生生活を活力あるものとするため、学生自治会活動、四国農学連行事などの自主的運営を支援する。	農大祭において学生自治会活動等の成果を展示する。 本年度、四国農学連行事は本校が事務局であるため、学生自治会が主体的、計画的に運営し四国農学連の各行事を成功させる。また他県の学生と交流を深める。	学生自治会が主体となって農大祭を運営し、各学生のプロジェクト等の紹介パネルを展示した。 四国農学連行事については、本校学生自治会が事務局として企画・運営を行った。農学連スポーツ大会では全種目に参加し、軟式野球及び卓球については準優勝であった。意見発表会も含め、各大会運営を通じて他校と交流を深めることができた。	A	A	次年度事務局担当校に事務の引き継ぎを適正に行い、次年度の四国農学連行事の運営が円滑に進むよう協力する。
		2 学校行事(剣山登山、農大祭、収穫祭、四国農学連スポーツ大会等)について、仲間が共同し企画、運営することを支援し、行事を成功させる。	各学校行事の事後アンケートを実施し、学生の満足度を80%以上にする。	学生自治会主催で、校内の行事としては農大祭、新入生歓迎ボウリング大会、収穫祭等を、四国農学連行事としては、総会、スポーツ大会、意見発表会を成功させた。 事後アンケート「学校行事は充実したものになった」の肯定的評価が89.8%、「自治会活動や学校行事は、仲間作りや連帯感を高めるために役立った」の肯定的評価が87.8%であった。	A		学校行事は、学生生活を豊かにし仲間づくりの場ともなる重要な活動であるため、学生の主体性を尊重しつつ各行事の課題点を改善し、更に充実させられるよう指導する。
学校関係者委員の意見		・自治会役員を含め、学生たちが頑張っている姿にうれしく思いました。					

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題	
⑥	積極的な教育活動の改善並びに学校運営の改善	1 課長会、コース会等を定期的かつ効率的に実施し、学生指導、コロナ禍における対応をはじめ、危機管理、コンプライアンスなどに関する情報交換や研修を行うことで、教育課題の共通認識、指導情報の共有化、並びに教職員の資質向上を図る。 また、効率的かつ実践的なカリキュラムの編成に向けカリキュラムの見直しを再検討し、地域農業等のリーダーとなり得る人材育成を図る。	課長会を月1回以上、コース会を月2回程度実施し、学校運営改善や教育指導改善につながる研修(勉強会)を継続的に実施する。 組織アンケートを行い、学生の理解を深める情報交換や組織力等に係る職員 の肯定的評価を90%以上にする。 来年度のカリキュラム編成に向けた検討会を実施する。	課長会・職員会を開催するにあたり、コース会議や校務担当での事前の協議を密に行い、会議を円滑に行う事ができた。課長会・職員会の開催回数は12回、コース会議および各校務担当会議は適宜開催し、情報共有を行った。 課長会等において、学生の学習や生活の状況について情報を共有する他、学生指導について指導方針を協議しながら共通認識を図った。また、職員による始業前の朝会や、ホワイトボードへの記載等により、1日のスケジュールや学生への指示事項を共有した。 今年度は、「コース内における情報共有」が十分できていると感じる教員の割合は36.4%となり、肯定的な評価(その通りである、どちらかと言えばその通りである)では、昨年度の91.7%に対して今年度は90.9%となった。 カリキュラムの編成に向け、昨年度より職員へ事前アンケートを2回、検討会を3回実施し、職員の意見を十分把握、協議を行い来年度のカリキュラムの編成を行い実践的なカリキュラムとなったと思われる。	B	B	学生の状況や個々の教職員の教育活動についてより共有し、より透明性の高い学校運営に努める。 また、教職員の更なる積極的な情報交換・協議の機会を増やせるようスケジュール管理を行う。 不測の状況にも対応できるようBCP(事業継続計画)を構築していく必要がある。 今後とも、カリキュラムについては、定期的な見直しを検討していく必要がある。
		2 定期的に、学校教育目標に基づく具体的な取組のモニタリングを実施し、指導の進捗状況や適切さを評価する。	指導の進捗状況を適切に評価するため、校務分掌やコースの業務に関するモニタリングを年2回実施すると共に、外部評価も行う。	教員対象学校評価アンケートの、課長会での積極的な情報発信や教育活動及び学校運営上の諸問題への取組みに関する項目では83.3%の肯定的回答が得られ、改善に努力していることが示された。また、外部評価委員会では、カリキュラム編成や運営において、時代に沿った農業経営や多様な担い手の要望に沿っており、ニーズ把握とそれに対する対応について高く評価された。	A		引き続き、学校評価結果を活かした目標を設定し共有することにより、職員間の相互協力体制を強化すると共に、意欲を持って学校運営に参画できる雰囲気をつくる。
		3 個人情報に十分配慮し、共有フォルダを活用した情報共有体制を構築していく。また、より検索し易いフォルダの体系を構築する。	個人情報管理の適正化と必要なファイルの検索性向上のために、ネットワークサーバーのフォルダ構成を再構築する。構築するにあたり、検討会を年3回程度行う。	農業大学校職員共有のネットワークサーバーを整備し、個人情報管理の適正化とファイルの検索性向上のために、校務担当ごとにネットワークサーバーのフォルダ構成の構築を行った。また、同時にネットワークサーバーのフォルダとリンクした共有書庫を整備し、個人情報に配慮しつつ情報共有体制を構築した。	A		共有フォルダを活用した情報共有体制を更に検索しやすい体制を検討していく。
		4 高等学校との連絡・連携を密にし、学生の生活指導や教育活動の改善に活かす。	年2回の高校訪問や電話連絡を通して、学生指導に関する情報交換を行う。	今年度は年1回から2回の高校訪問を実施し、学生に関する情報交換を行った。また、オープンキャンパスを2回開催するとともに、希望者に対して個別対応も行った。	A		今後とも、高等学校との連絡・連携を更に密にし、学生指導に関する情報交換を行う。
学校関係者委員の意見		言及なし。					

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
⑦ 心の通う人間関係を構築する能力の素地養成	1 教職員の人権意識を啓発するために人権研修を行う。また、いじめなどの問題を早期発見するための研修を行い対応能力を高める。	学校評価アンケートにおいて、授業、実習や行事を通じて、学生の人権意識を高めるよう配慮したと回答する教職員が90%以上とする。	教職員対象の人権研修を受講するなど、人権意識の高揚に努めた。学校評価アンケート「授業、実習や行事を通じて学生の人権意識を高めるよう配慮した」に対する教職員の肯定的回答は84.6%であった。	B	B	引き続き、職員に対する研修を実施する。
	2 学校生活において問題を抱えていると思われる学生との面談をとおして、心理的な問題等を早期に発見し、組織的に対応する。	学校評価アンケートにおいて、人権を尊重する仲間づくりができたと回答する学生が80%以上とする。	学校の教育活動全体を通じて、人権を尊重する意識の涵養に努めた。学校評価アンケート「人権を大切に作る仲間づくりができた」に対する学生の肯定的回答は93.8%であった。	A		日頃から学生の様子を観察し、必要に応じて個別面談等を実施するなどして、人権尊重の意識付けを行う。
	3 学生の悩みを解決するために、学生、家族等、教職員による三者面談を開催する。学校と家庭が連携し、協働する体制を構築し問題解決にあたる。 また、スクールカウンセラーを配置し、カウンセリングを受けられる体制を整備する。	年1回の三者面談に加え、学校生活に関する調査を年2回実施し、いじめをはじめとする学生生活上の問題を早期発見するとともに、必要と思われる学生全員に教育相談を実施し、問題解決を図る。 スクールカウンセラーを令和5年6月から令和6年2月までの間、配置するとともに、スクールカウンセリングに関する教職員研修を2回以上実施する。	三者面談を1年次生及び2年次生に対し1回実施した。また、学校生活に関する調査を2回実施し、要注意回答をした学生に対しては、個別面談を実施した。 スクールカウンセラーを令和5年6月から令和6年2月までの間に配置し、延べ21回のカウンセリングを受けた。また、悩みを抱える学生対応についての職員研修を2回実施した。	A		引き続き、三者面談、学校生活に関する調査を実施する。気がかりな点について職員間で情報を共有し、きめ細かな指導を行う。 スクールカウンセラーも引き続き配置し、学生が相談できる機会を確保する。
学校関係者委員の意見		言及なし。				

令和5年度 徳島県立農林水産総合技術支援センター 農業大学校学校評価 総括表その2

「評価」及び「総合評価」の評定基準

A：十分達成できた B：概ね達成できた C：達成できなかった

<p>本年度の重点目標② 地域農業への寄与</p> <p>農業体験学習、模擬会社の運営、6次産業化への取り組みなどを通じて、社会との連携を深め、総合的な指導体制のもと、幅広い経営能力を養成するとともに、地域農業等に寄与する。</p>	<p>総合評価</p> <p>Ⓐ・B・C</p>	<p>(所見)</p> <p>農業生産技術コースでは、「栽培から販売までの知識と技術を持った人材の育成」を課題として、年間を通して多種多様な作物(水稲・野菜・果樹等)を扱うことにより、学生の栽培・飼養管理における知識・技術の習得を支援した。学生プロジェクト18課題において、地域農業の諸課題について検証・改善した。</p> <p>6次産業ビジネスコースでは、プロジェクト学習の中で、加工品試作、試食アンケート、改良を繰り返し、商品開発を実践している。また、体験学習、6次産業巡見、SunSunマーケット等への出店など、学外での活動を通し、地域の実践者と直接ふれあうことで、コミュニケーション力の向上、視野の広がり、学びへの刺激が得られ、これからの経営者として必須である、地域と連携することの重要性を学んだ。</p> <p>農業・6次産業体験学習、農業・6次産業巡見、模擬会社「そらそうじゃ」の活動等を通し地域農業との連携を図った。また、日頃の農大ロビー販売、農大祭及びSunSunマーケット等における販売活動をとおり、6次産業化に積極的に取り組んだ。</p> <p>情報発信及び広報活動に関しては、学校生活の様子や研究成果などは農大新聞「GoGo農大」やセンターニュース、石井CATV等で紹介し、地域農業や6次産業への貢献を図るとともに、農業大学校自体の広報を行った。</p> <p>以上とから「地域農業への寄与」に関する総合評価はA(十分達成できた)とした。</p>
--	--------------------------	--

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
<p>① 栽培から販売までの知識と技術を持った人材の育成</p>	<p>1 学生が主体的にプロジェクト課題解決学習に取り組むとともに、日々の栽培管理は学生同士が協力して実践する。また、活動の成果は農業者をはじめ広く情報発信する。</p>	<p>全ての学生が生産技術の向上につながるプロジェクト課題に取り組むとともに、農大ホームページやセンターニュース等を通じて、情報発信に努める。</p>	<p>全ての学生が主体的に生産技術の向上につながるプロジェクト課題に取り組んだ。また、優秀なプロジェクト成果については、県内ケーブルテレビでの放映に加え、センターニュースへの寄稿、農大祭やオープンキャンパスでのパネル展示などを通じて、情報発信に努めた。</p>	A		<p>引き続き、学生自らが課題を設定し、自主的にプロジェクト課題解決学習に取り組める環境を整備する。</p>
	<p>2 「農大祭」や「ロビー市」等で販売する商品の栽培方法や機能性等について、コース実習や校外研修等を活用して、十分な知識を習得させる。</p>	<p>コース実習を通して20品目以上の農作物を生産し、「農大祭」や「ロビー市」等で販売する。</p>	<p>農大祭に向けては、7月に作付計画を作成し、生産体制として2年次生全員が生産品目の主担当又は副担当として活動することにより、農大祭では22品目の青果物を販売した。また、サツマイモ掘り体験や野菜・果物の詰め放題などのイベントを通して、農業への理解を醸成した。</p>	A	A	<p>新2年次生の農業生産技術コースの学生数が8名(38%)と少ないため、生産品目数を限定する必要がある。</p>
	<p>3 徳島県立農林水産総合技術支援センターや農業団体等の関係機関との連携を深め、先進的な栽培方法等について調査、研究する。</p>	<p>研究機関で開発された新技術の実証やスマート農業技術及び有機資材の有効活用など環境負荷低減に資するプロジェクト課題に取り組む学生を50%以上にする。</p>	<p>コース内の全プロジェクト課題のうち、スマート農業技術や環境負荷低減に資する課題数の割合は56%であった。</p>	A		<p>生産力や品質の向上、省力化の推進及びみどりの食料システム戦略に寄与する課題の取組を指導する。</p>
<p>学校関係者委員の意見</p>		<p>・土壌病害による収量減を防ぐ研究等、次の段階へ踏み出した研究ができていると思う。卒業してからも続けて研究してほしい。</p> <p>・実践的で経営者になれる人材を育ててほしい。</p>				

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
② 農作物の付加価値販売に つなげる人材の育成 (6次産業を身に付けた ビジネスコース)	1	プロジェクト活動において、6次産業化を伴う農業ビジネスモデルを研究・実践する。	プロジェクトで「6次産業化」ビジネスモデルの研究に取り組む学生を80%以上にする。	100%の学生が、商品開発に向けた加工、コストを勘案した価格設定に取り組む、その成果を卒業論文にまとめた。	A	A 地域課題を踏まえた6次産業化に取り組み、経営感覚を身に付け、プロジェクト活動を更に充実させる。 市場ニーズを意識したプロジェクト活動を増やす。 引き続き、適切な方法で課題解決できるよう指導する。
	2	学内外での実践活動における、市場調査等を通じて、消費者や市場ニーズを把握、分析し、商品開発や販売戦略等に活かす。	学内外における販売活動を通じ、市場ニーズの調査を行い、商品開発のヒントや販売手法を学ぶ学習機会を年3回以上とする。	新型コロナウイルスが5類に移行したことから活動範囲を広げ、神戸市の阪急オアシスや徳島ヴォルティス学園祭などの県内外の展示販売イベントに参加するとともに、農大祭をコロナ禍前の2日間開催に戻し、消費者ニーズを把握した。消費者とのコミュニケーションから価格や量、パッケージなど多くのことを学び、商品開発に役立てた。	A	
	3	プロジェクト活動に取り組む過程で、プロジェクトマネジメント、ブレインストーミング、PDCAサイクル等の手法を習得させる。	課題解決のための手法を利用できる学生を70%以上とする。	プロジェクト活動の計画や実施の過程で、様々なアイデアを検討し、適切な結論を導き出すことができたとする学生は、成果発表から90.9%であった。	A	
学校関係者委員の意見		<ul style="list-style-type: none"> <li>・剪定等でスダチの隔年結果を防ぐ研究等、次の段階へ踏み出した研究ができていると思う。卒業してからも続けて研究してほしい。</li> <li>・実践的で経営者になれる人材を育ててほしい。</li> </ul>				

課題	活動計画(具体的方策)	評価指標(数値目標)	評価指標の達成度と活動の実施状況	評価	評価	次年度への課題
③ 地域農業への寄与のための 研究成果や学生活動に係る 積極的な情報発信	1	平成30年度より稼働した六次産業化研究施設を活用し、加工品開発に取り組み、地域社会へ発信する。	コースや模擬会社において、販売まで至った加工品を10品以上開発し、校外販売やSNSなどを通して地域に発信する。	大学イモ、紅白ポテト、レトルトスープ(カボチャ・ジャガイモ)、完熟スダチポン酢、和紅茶、自然薯ナゲット、スダチあんバターパンなど22品目を開発し、ロビー販売、校外販売、農大祭で販売した。	A	B 多数の加工品を開発、販売できたが、商品情報の積極的な発信が不足しているため、新商品は必ずSNSで発信する。また、パッケージやポップ等もさらに学習をすすめる。 引き続き、広報紙の発行、農大HPの更新並びにHP「農の宝島」への情報提供を行い、積極的な情報発信を行う。 また、卒論、研究等の発信については、年次報告やパネル展示といった既存の方法に加えて新たな方法も検討する。 引き続き、積極的に入学生の確保に努める。 農業教育の専門校としての特色紹介に注力する。
	2	学生の研究や学校生活、「そらそうじゃ」の活動状況等定期的な広報等を作成する。 また、農大HPその他の情報発信ツールを活用して農業関係機関、関連企業、高等学校だけでなく、一般社会に対しても積極的に情報発信を行う。	教育活動に関する広報紙「GoGo農大」を年間12回以上作成して公開する。募集案内等をHPにて2週間程度で更新し、最新の情報を一般社会に発信する。 Twitterアカウントにより、最新の学生活動等の情報を月1回程度で更新し、情報を発信する。	教育活動に関する広報紙を年間10回作成して、公開した。2回分も作成予定。 農大HPの更新については、微細な変更を含めると30回程度更新・修正を行い、最新の情報にその都度更新を行い、一般社会に発信を行った。 X(旧Twitter)アカウントについては、4月から学生活動等の情報を6件更新を行ったが、県組織全体のSNSアカウントの見直しに従い、3月をもってアカウントを廃止した。	B	
	3	本校の教育活動に関して積極的な情報発信・広報活動を行い、未来の徳島県農業を担う意欲と活力に満ちた新入学生を確保する。	高校訪問等を年間2回以上行い、高校でのガイダンスにも積極的に参加する。また、高等学校の依頼があれば、キャリア教育に係る体験的な活動の実施に協力する。 広く社会人も含めて積極的な参加を募りオープンキャンパスを開催する。	高校訪問1回、高校への電話案内及び資料送付1回、学生募集説明会1回、オープンキャンパス2回、進路ガイダンス(高等学校での模擬授業を含む) 22回(3月7日現在)を実施した。 オープンキャンパスでは、学校施設の案内の他、農業生産技術コース、6次産業ビジネスコースに分かれ体験学習を実施。 県内の高等学校における進路ガイダンスでは、座学と実習が結びついたカリキュラムの特徴を紹介するとともに、模擬授業では環境にやさしい農業技術の実践等をテーマに農業技術に特化した授業を実施した。	B	
学校関係者委員の意見		<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生対象アンケートの質問「農大の学習内容や学生生活について、外部の人々に説明することができる」の結果から、地域農業への寄与について総合評価をAにするべきではないか。</li> <li>・農大の定番商品をもっと増やしてほしい。また、農大の商品であることが分かるようなパッケージにしてはどうか。農大の商品には安心感がある。</li> <li>・卒論、研究等の発信ツールはもっとないものか。県民、全国民に知ってほしい。</li> </ul>				